みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.99

目次　2020年6月

ひと言　小幡佳緒里　1

特集 コロナ休校で子ども・学校・教育は

コロナ問題　学校はどう向き合うべきか　数見　隆生　2

コロナ休校のなかで感じてきたこと・考えたこと
コロナ禍の中で正しく恐れながら進む道を求めて　安達喜美子　5

コロナ状況下での教員としての葛藤　森　峻平　6

コロナ禍と「かしのみ学級」の子どもたち　髙橋愛一郎　7

「なんでこんな不自由な生活を強いられるわけ？」　矢部　英寿　8

休校に思う「学校」の温もり　千坂　朋広　9

コロナ禍の世を生きる　伊藤真由美　10

休校と「通信」教育　渋谷　耕造　11

目の前の子どもから出発　藤田　康郎　13

コロナ禍に翻弄される私立高校と
岐路に立つ高校無償化　加藤　俊直　14

ここからスタート　近藤　裕美　16

新たな取り組みをしてみるいい機会　佐藤　秀　17

緊急事態下の子どもたちを守るもの　鈴木　宏之　18

コロナウイルス・未知の脅威が問う教育の役割
—どんな学校を開くのか？—　本田　伊克　20

98号感想
サルとコロナと私たち～内なる自然に向き合うとき～　伊野　文子　24

わたしの出会った先生　30
出会ったからこそ、つながる今　佐々木紀子　25

相談センター報告 第21回
ひきこもり問題　齋川　勝利　26

おすすめ映画
「ひろしま」関川秀雄監督　伊藤　真弓　28

センターの動き・編集後記　28

表紙写真：朝市センター保育園　題字：江島　隆二

ひと言

民意が政府の暴挙を止めた！

小幡佳緒里（弁護士・センター運営委員）

本年3月、政府は、検察官の役職定年を63歳と定めつつ、内閣又は法務大臣が「職務上の特別の事情を勘案し」「公務の運営に著しい支障が生じる」と認めるときは、63歳を超えても、その役職のまま勤務させることができる、という検察庁法一部改正案を通常国会に提出した。

検察官は、犯罪の嫌疑があれば、政治家、総理大臣であっても捜査の対象とする。そのため、独立性、公平・中立性が確保されなければならない。内閣や法務大臣に検察官人事への介入を許せば、刑事司法の運用は根底からゆがめられることになりかねない。

しかも、政府は、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、集会、デモ行進など、直接民主主義的な表現の自由が事実上大きく制約されている状況下において、改正案の審議・採決を強行しようとした。民主主義をないがしろにする暴挙であるというほかない。

これに対しては、これまで類例を見ないほど、著名人を含む多くの市民が反対意見を表明し、政府の対応に抗議をした。政府が今国会での改正案成立を断念したのは、これら市民の抗議の声を無視できなかったからだと考える。民意が政府の暴挙を止めた！この意義は極めて大きい。

特集

コロナ休校で子ども・学校・教育は

コロナ問題　学校はどう向き合うべきか

数見隆生

政府は去る2月28日、突然新型コロナウイルスへの対応から全国の小中高校の一斉休校を要請した。それを受けて、宮城県・仙台市の学校は3月2日から急遽年度末の授業・行事等を打ち切り春休みの休業体制になった。そのことで、ほとんどの学校では大事な学年末の授業や卒業式・終業式というけじめの活動を十分に行えなかった。そればかりか、それ以降の全国的な感染者の増加により、宮城県・仙台市では新年度の入学式・始業式も4月15日以降に延期したが、それを連休明けの5月6日（後に10日）までの休校措置に再延期し、さらに政府の緊急事態宣言を受けて、再々延期として5月末日までに踏み切ったのだった。

子どもたちの「命を守る」という大義名分のもと、感染の地域差や学校規模等の考慮もなく、国が突然全国一斉にしかも教育機関や医療の専門家の十分な根拠ある裏付けをするでもなく、官邸主導で唐突に実施されたことに多くの関係者（教員や学校関係者、保護者等）から戸惑いや違和感が沸き起こった。私もその困惑を抱いた一人だった。

1．政府の「一斉休校」指示に対する私の違和感と困惑

私の抱いた違和感や困惑は、まずは自分の専門（学校保健学）の歴史的視点からである。

戦前はもとより戦後にかけてもだが、国は国体護持や社会統制を目的に学校や子どもに様々な規制や行動を強いることを行ってきた。特に戦前では、開国による各種伝染病の流入や海外進出と戦禍がらみによる疫病流行（スペイン風邪・結核・痘瘡、等々）への対策として、学校への規制や子どもに対する各種予防接種の強制を行った。それは子どもの命を守るというより、社会的蔓延を防ぎ、国体（戦前では富国強兵の国策）を護るために、学校が一律に即実行を強いられる場であったからだ。10～15歳前後の児童・生徒期は人生で最も免疫力が高く、感染はしても重症化しにくい年代にも関わらず、国防の防波堤として位置づけられ規制・強制されてきたのである。インフルエンザワクチンは戦後昭和40年代まで副作用事故が生じている中でも学校で半強制接種されてきたのである（この問

題はハンセン病者への隔離政策が戦後にまで継続された発想に通じるものである）。総理の唐突な全国一律休校宣言とそれに99％の公立学校が即従った状況に、こうした過去の思いからの困惑が私にはあった。

確かに、学校は子どもの命を守ること（生存権保障）を最優先に考えなければならない。その危機的条件を十分考慮しつつも、同時にかつてルソーがいみじくも言った「人生に二度とない、後では取り返しのつかない子ども期」の発達保障をどうするのか、本来的学校の任務、教員の役割をどう果たすのか、についても十分熟慮すべきだからである。命を守ることと発達支援の両面の保障を十分考慮しての判断だったのかどうか。市町村の教育行政、多くの学校教員の戸惑いの声、様々に子育てをしている保護者の困惑、学校給食がなくなることで困る児童、急遽大変な対応を迫られる児童館（学童保育）の状況、そして保育所はそのままで大丈夫なのか等々、様々な声や問題を背負ったままの見切り発車であったことへの違和感であった。

2．「学力」と「人材」育成で動いている
日本の教育状況とコロナ禍の問題

3月からの休学が1ヶ月、2ヶ月と経過する中で、前記の戸惑いや困惑は一層膨らんだ。部外者にはこの間の県や市の教育行政の仕事ぶりや現場の学校内の活動・教員の仕事の様子はほとんど見えてこなかった。私には孫がいて、親が共働きのため午前中だけ学校に行っているが、午後は親双方の祖父母が交代で迎えに行き、預かることをしてきた。孫は「学校に行っても楽しくない」とよくこぼした。学校が本来の学校の役割を果たせなく、教師の任務が遂行できなくなっているように感じた。学校に来ている子は多くないが、遊んではダメ、話してはダメ、先生に聞いたり尋ねるのもダメ、一人で「本を読んだり、ビデオを見るだけ」で、先生からは「マスク・手洗い・離れなさい」という指示だけ、というのだ。なぜか。教師が指導すると、学校に来ている子と来ていない子に学力差が生じると思う保護者がでるからしい。まさに学校は「教育してはいけない場」になっているようなのだ。

最近の河北新報にコロナ禍と学校に関する2度の社説記事が載った（4／15・5／9）。「学校の休校長期化」と「宮城の学校再開」が表題である。共に、学校はこれでいいの、という心配が主な記事なのだが、どちらも長引くと「学力低下」を招くから、ＩＣＴ教育（コンピュータとインターネットを活用した教育）で工夫をしろという主張になっている。こうしたメディア発想も、まさに今日の文教行政に乗っかったグローバル経済競争社会下での「学力」主義、「人材」養成機関としての学校論・教育観に染まった発想に思えてならない。「学力低下」発想だけでコロナ禍の一斉休校の心配をすると、パソコンやタブレットを使ってのオンライン学習の普及を急げという教育機器やネット環境整備の主張になってしまう。それでなくても、近年ＡＩブームと教育ＩＣＴスタンダード化が急速に進められ、学校は教育基本法の理念である「人格形成」から大きく外れ、グローバル経済競争の枠組みに組み込まれる状況下にある。今回の一斉休校は、こうした教育のＩＣＴ化、教材のデジタル化を一層進行させる動きを助長させるであろう。こうした政策的動向にメデイアや世論、そして学校が無批判的に組み込まれていくのを心配するのである。

3．今こそ学校は、「人間を育てる場・機関」
であることを取り戻そう

この3ヶ月間、学校と教員に生じた「突然の不意の余裕」で、関係者は何を考えたか考えなかったか、このことは極めて重要だと思

われる。「学校とは」「教師とは」「学力とは」「子どもの成長や発達とは」「これから学校・教師は何のために、どんな子どもを育てなければならないのか」、そして教員として、子どもと再会したときに「どんなことを語りかけたいと考えたか」そういうことこそがコロナ禍を乗り越える道ではないか。

また、この間、「3密」対応の教育活動として、各種のプリント作成や動画の工夫、オンライン教育やｗｅｂ会議など、様々な工夫をしてきたものと考えるが、それはそれとして限定的に意味のある経験だったと思われる。だが、そういう経験をして「やはり教育活動はこうあるべきだ」「本来の授業のあり方はこうだ」とも考え直したことであろう。プリントやドリルで「知」に関わることや一方的な「動画」での限界、仲間と一緒に知恵を出し合い精一杯考え合う授業の意味や、音・美・体の心身の表現活動を通して仲間とつながり合うことの意義、等の見直しこそ重要ではないだろうか。

かつて高度経済成長後に、「子ども期の喪失」が大きな話題になったが、近年さらにその取り返しのつかない学校・教育の事態が進行しつつあるように思う。子どもが子どもらしく夢中になって遊ぶとか、様々な自然や社会と関わって様々な不思議や課題に気づいていく、そういう育ちや学びが奪われていることである。コロナ禍で心配すべきは、子どもたちは遊びを奪われ、切磋琢磨する人間関係を損ない、成長の基盤を奪われたことである。思春期・青年期の子どもらへの心配は、「学力低下」という受験競争原理からの不安ではなく、「持続可能な社会・未来を創造していける学び」の主体を育てられる中身（内容と方法）への展望こそが、見直されなければならない。国連で環境問題を訴えたスウェーデンの少女グレタさんのような若者を意図的に育てられるような教育をどう創造するかについてである。

（宮城教育大学名誉教授・センター運営委員長）

新型コロナウイルスに対する国・教育行政の主な対応と経過

2020	2	27	国	安倍首相による突然の臨時休業要請（３月２日月曜日から）
	2	28	文科省	全国一斉臨時休業を通知（春休み前まで）　家庭学習の課題
	3	13	文科省	補充のため長期休業短縮や土曜授業　負担考慮
	3	24	文科省	通知「教育活動の再開等について」　ガイドライン
	3	26	文科省	進級後未指導部分の授業を行うこと　３密排除　行事の開催
	4	1	県教委	年度当初学校活動留意点（通知）児童生徒の検温等の記録
	4	6	文科省	「登校させたくない」⇒「出席停止」もありうる
			県教委	臨時休業通知（春休み明け～４／14）
	4	7	国	緊急事態宣言（７都府県～５／６）
	4	10	文科省	通知「児童生徒の学習指導」教科書の配付、再開後の指導
	4	13	県教委	臨時休業通知（～５／６）
	4	16	国	緊急事態宣言全国へ拡大（～５／６）
	4	17	県教委	在宅勤務（通知）
	4	29	県教委	臨時休業通知（～５／10）個人情報に関する業務以外を対象
	5	1	国	感染症対策に関する懇談会「提言」小１・６、中３の優先的取扱い　３密防止　ＩＣＴ活用など
			文科省	臨時休業に係る学校運営上の工夫について（通知） ３密防止　分散登校　学校行事・修学旅行の中止など
	5	4	国	緊急事態宣言延長（～５／31）
	5	5	県教委	臨時休業通知（～５／31）
	5	13	文科省	高校入試について（通知）出題範囲や内容・方法の工夫
	5	15	文科省	「学びの保障」（通知）　遅れ複数年で解消　過重負担の解消
			県教委	学校再開対応等（通知）時差・分散登校、１教室20人程度
	5	22	文科省	事務連絡「水泳授業の取扱い」水中感染のリスクは低い
			文科省	学校における衛生管理マニュアル「学校の新しい生活様式」感染者が出た場合、一律に一斉の臨時休業ではなく、出席停止や分散登校を取り入れつつ臨時休業について判断
	5	14	国	緊急事態宣言解除　39県
	5	28	県教委	学校再開に向けたＱ＆Ａ　解熱後３日健康観察して登校
	6	1	自治体	学校再開（県立・仙台市立等）七ヶ宿（５／11再開）加美・色麻・東松島（５／25再開）

※　詳しい経過と内容は別紙参照（宮教組資料を基に作成）

保育園

コロナ禍の中で 正しく恐れながら進む道を求めて

安達 喜美子

5月1日、手作りの鯉のぼりと子どもたちの歓声が保育園の屋上に踊りました。5月の風を腹いっぱいに吸い込んで元気に体を揺らす今年の鯉のぼり、その体を埋め尽くしているのはメッセージが書かれた色とりどりの画用紙のうろこです。「みんなと外でいっぱい遊びたい」「おばあちゃんに会いに行きたい」と子どもたちの声が綴られたうろこ、「朝市場がまた賑わいますように」と大人たちの切実な願いが滲むうろこ。うろこの数は全部で約400枚。コロナ不安が社会を覆いつくす中、「鯉のぼりに願いを載せて大空に泳がせよう」との保育園の呼びかけに応えて400余のメッセージが「鯉のぼりの会」に寄せられたのでした。

2019年末から新型コロナウィルスが世界に広がり始めました。この未知の感染症に対して程なく日本も騒然となり、1月末頃からは、「帰国者、接触者、37・5℃以上の発熱に注意」「園児又は職員が感染した場合、濃厚接触者が複数いる場合、近隣地域での流行が認められる場合は、臨時休園を検討する」といった行政メールが頻繁に届くようになりました。そして4月13日、仙台市は保護者に対して5月6日までの登園自粛のお願いを発信、その後、自粛要請は5月31日まで延期されることになります。2か月を超えての長期欠席、育休からの復職期日の延長、求職活動期間の延長などを認めるとともに、保育園を休んで家庭で過ごす場合は、保育料を返還するという措置が取られたこともあり、朝市センター保育園における4月13日～5月31日の登園率は54％でした。1か月半の間ずっと休園していた子もいます。ひっそりと様変わりした保育園の中では、検温記録、次亜塩素酸での園内の消毒、室内の換気、入室時の手指のアルコール消毒、そして、一つところにみんなで集まることをやめ、歌を歌うことをやめるという状態が続けられました。「闇雲に怯えるのではなく、正しく恐れて、やるべきことに集中しよう」と職員は手足を動かしながら未知の感染症の不安と戦っていました。

一方、在宅ワークの大人たちの傍らで、子どもたちはユーチューブやゲーム漬けの毎日を過ごしているとのこと、「生活リズムがぐちゃぐちゃ」「子どもの情緒が不安定」「イライラして必要以上に子どもを叱りつけてしまう」といった声も聞こえてきます。

また一方では、恐れていたことが起こりだしていました。生活基盤の深刻な危機です。「職場に行ったらもう明日から来なくてもいいと言われ、急遽、求職活動をすることになった」と言ってきたお父さん。アーケード通りのショップに勤める20歳台の若いお母さんは、「ほとんど店に出ることができない。しばらくは知人の手伝いで山形まで通うことになるので夜8時30分までの延長保育をお願いします」と。「休業補償があればすぐにでも店を閉めます。進むも地獄、留まるも地獄です。」という国分町近くの飲食店の店主は、保育園の職員がテイクアウトのお惣菜を注文すると、少し笑顔が戻りました。

そんな中、年間行事で予定していた「鯉のぼりの会」が近づいてきました。

1951年5月5日に制定された児童憲章の精神を忘れないためにも、子どもの日の「鯉のぼりの会」は、何らかの形で開催したいと思っていました。すると、職員の中から「今は何が正解なのか分からず不安が払拭されない。でも、少なくとも保育園を通してみんなが繋がっていることを感じたい。繋がっていることを力にして前を向きたい。」そんな声が出されました。

さっそく、鯉のぼりプロジェクトが動き出しました。家でうろこ作りに精を出す子どもの様子が写真で送られてきたり、願いがしたためられたうろこが朝市場から届けられたりしながら、5月1日、鯉のぼりは完成しまし

た。様々な色のうろこがひしめき合うカラフルな鯉のぼりはコロナ禍の不安を切り裂いて進む小さな希望の船のように見えました。（この日のことは5月8日の河北新報夕刊に載りました。）

コロナ禍の中で私たちは、現場の献身的な努力に支えられているこの国の医療・福祉・教育体制の健気さと限界を目の当たりにしてきました。今後、〝ｗｉｔｈコロナ〟の新しい日常に変えていくのだと言われます。であればなおのこと、医療に携わる人々が希望をもって働き続けられるように、安心して検査の拡充ができるように、ワクチンや特効薬の開発に十分な資金と設備が準備されるように、今こそ国の抜本的な政策転換が必要なのではないでしょうか？

そしてもう一つ、コロナ禍の中で感じたこと、それは、保育の環境とは、言葉を交わし合い体も心も密接に触れ合うことで成り立っている「密接」・「密集」の現場なのだということです。「密閉」はともかく、「密接」・「密集」が奪われることは、保育にとってウィルスの最大の脅威なのかもしれません。私たちの今後の課題は、「正しく恐れる」ことの中身の精度を上げていくことだと感じています。

（朝市センター保育園・センター運営委員）

小学校

コロナ状況下での教員としての葛藤

森　峻平

新型コロナウイルスが広まり、学校が臨時休業になってからのこれまでの期間、多くのことを考えさせられた。それを整理して伝えるということはとても難しいことである。また、この「正解」が何か分からない世の中で、自分の考えを述べることすら怖く感じる。でも、自分の考えたことを正直に述べたい。

まず、多くの人が比べたのは東日本大震災の時との差ではないだろうか。自分はその時、福島県で教員をしていたから、震災の大変さを少しは分かっているつもりだ。

この状況が始まった頃は、「震災の時よりはいいですね。あの時は、放射能のせいでみんなバラバラになってしまいましたから！」と言っていた。だが、これだけの事態になるとは……。もともと比較するものではないのかもしれない。私自身はだれも身近な人を失っていないから幸せなのだと思う。震災でも、コロナでも大事な人を失った人がいると考えると、どっちがいいということを言えないなと感じた。

さて、学校現場について考えてみると、これは震災の時も感じたことだが、誰もどうしたらいいか分からない「未曾有」の事態でこそ、学校力が発揮されると思った。「何を優先するか」「一番に考えなくてはいけないことは何か」「他校は、他市は、他県は、他国はどういう動きをしているか」毎日のように情報集めをしていた。

そこでたどり着いたのは、やっぱり自分たちが一番に考えなくてはいけないのは「子どもたちの幸せ」である。「子どもたちにとって今何をすべきか」「何をしてあげられるか」これを考え続けていた。

ただ、未曾有だから、何をしてあげられるか簡単には思いつかない。「これまでの固定概念を捨てて、新しいアイディアを！」そう思うけれど、そこは教員の弱いところだと感じた。自分の型をもっていて、それを簡単に壊せない。壊す勇気が出ない。子どもたちにはあれだけ「トライしなさい！」「チャレンジしなさい！」と言っているのに……。

そんな中、「オンライン授業」の話が出てきた。すぐにみんな飛びついてやり始めた。でも、自分は乗り気になれなかった。テレビで放送されている先生方のオンライン授業のぎこちなさ……。普段やっていないことをやるから、とてもぎこちなかった。「まずやってみる！」という精神は私も嫌いではない。「トライ&エラー」を繰り返すことで教育はよりよくなっていくのだと思うからである。ただ、そこで感じたのは、私たちはいつも授業をや

る時に、子どもたちの微妙な空気感の中で発問を変えたり、話し方を変えたりしているということだ。「授業は生き物」という人がいるが、本当にそうだと思う。現時点でのオンライン授業はパソコンというフィルターを通して「AI」と話しているような感覚になってしまう。何か生きていないような……。

多くのことで悩んでいると、次々に決まっていく多くの行事の中止。「子どもたちの命を守るために」というが、「本当に子どもたちのことを考えたら、何とかやれる方法をみんなで考えていくことが大切なのではないか。本当に中止しか選択肢はないのか。形を変えれば、今年しかできないものを創ることができるのではないか」と頭の中を思いがぐるぐると回った。

本校では、令和元年度の卒業式を「6年生を送る会」の飾り付けで行った。例年通りの「別れの言葉」「歌」などは全てカットされたが、「在校生からのメッセージが書かれた垂れ幕」「卒業生一人ひとりに贈った漢字と顔写真」、多くの保護者の方が喜んでくださった。

こんな状況下でも、私たちにできることは必ずあるはず。そのためには、誰かの意見を叩くのではなく、建設的に意見を交わし合い、前向きに今できることを考え、実行していくべきだなと感じている。

（白石・白石一小）

小学校

コロナ禍と「かしのみ学級」の子どもたち

高橋　愛一郎

勤務校の特別支援学級（以下、かしのみ学級）は5学級（知的2、情緒1、肢体不自由1、病弱1）もある「マンモス校」で、児童数20人です。この子どもたちは、例えば、集団の中で褒められることで「ヤル気スイッチ」が入る子、信頼している先生との「確認」をするとその日の見通しを持ち安心して過ごせる子、等々、何かしら支援を必要としています。

学校に行けない

コロナ禍による臨時休業措置のせいで（事の発端は2月27日に突然発表したアベ首相要請）、かしのみ学級の子どもたちの日中の居場所が大きく変わることになりました。3～4月までの間は、①自宅、②学校（保護者が仕事を休めない場合に自宅等で一人で過ごす子ども）、③放課後デイサービス、④児童館、のいずれかとなったのです（下図参照。「学校と放課後デイサービス」のような組み合わせも有）。それまで、当たり前のように登校し、学年（学級）集団の中で一人ひとりに応じた学びを保障されてきた環境が、皆無となってしまいました。

そして、5月7日以降は、臨時休業の延長に伴い学校での受け入れ対象が「医療従事者等、保護者が仕事を休むことが極めて困難な場合」と制限されたので、学校以外の場所で過ごさざるを得ない児童が増えました。児童館や放課後デイサービスの利用者が増えたため、3密を回避できない環境に陥った、という各々の職員の悲鳴に近い声を聞きました。このような状況下、保護者の方々の心配・苦労も計り知れません。「親が在宅していても学校で受け入れて勉強させてもらえませんか。家では全然勉強しないから……」という要望も聞きました。

	①自　宅	②学　校	③デイサービス	④児童館
3月～4月	9	10	8	3
5月～	15	2	4	0

コロナ禍による臨時休業中の「かしのみ学級」児童の居場所（複数選択あり）

久しぶりの登校日

5月21日は臨時休業中の登校日でした。3密を避けるため、かしのみ学級の子どもたち

は4つの教室に分散させられました。2か月ぶりに数人の友達や先生たちと顔を合わせ、少し緊張した面持ちをしながらも、嬉しそうでした。わずか30分間だけの登校日。休業中の出来事を伝え合いました。RさんとYさんはゲーム（あつ森、スマブラなど）をしていたことを話しました。「あと、ちょっとだけ勉強した」と言ったところが、正直で、微笑ましい場面でした。Rさんは、伝えたい意欲が湧いたようで、自分の発表が終わった後も、何か思い出す度に、ぼくの側に来て話していました。Sさんは釣りに行ったことを話しました。「小さい蟹しか釣れませんでした。カレイは釣れなかったです」。Kさんも釣りに行ったそうです。「ハゼとアイナメと、あとドンコが釣れました」。

かしのみ学級の子どもたちは交流学級の児童とも会話を交わすことができました。6年生のYさんは、臨時休業中は好きなゲームがたくさんできてよかったんじゃないかという問いに、「ゲームはあきた。早く学校が始まってほしい」と答えました。6年生のRさんは、早く学校が始まってほしいかという問いに、「家にいることに慣れたので、このまま休みでいい」と答えました。子どもたちは各々の思いを持って、6月1日を迎えるのです。その時、ぼくたち教職員は一様に、「学校が再開して良かったね」と言うのでしょう。しかし、Rさんのような複雑な心境にも思いを寄せていかなければなりません（これは臨時休業後に限ったことではなく、一年を通して常にそうあるべきです）。

子どもたちの居場所の保障を

感染拡大防止を理由に学校を休業にしたのは国（市）です。市（国）には、災害弱者を守るため、予め障害のある子どもを対象とした居場所（施設・設備）とスタッフの確保を、公的サービスとして整備しておく責任があったのだと思っています（障害のあるなしにかかわらず必要なことですが、特に障害のある子どもたちを優先的に考えてほしい）。

コロナ禍による長すぎる学校休業は、かしのみ学級の子どもたちから、同じ教室で過ごす他者（友達や担任）との直接的なコミュニケーションの機会を奪いました。6月に学校が再開されたら、子どもたちと何気ないおしゃべりから始めて、緩やかに人間関係を修復（再構築）しなければならないなあ、と考えています。

（仙台・袋原小）

中学校

「なんでこんな不自由な生活を強いられるわけ？」

矢部英寿

新型コロナウイルスによる臨時休業が長く続きました。この時に感じたこと考えたことはいくらでもあります。子どもたちのこと、授業のこと、学校のこと、報道のこと、世の中のあらゆることについて考えました。何しろ時間に余裕がありますから。それで、考えたことや感じたことを文章にするよう依頼されました。さてと、とキーボードをたたき始めてちらっと頭をよぎったのは、滅多なことは言えないんじゃないか、という恐れです。

実はこの「滅多なことは言えないんじゃないか」という雰囲気に、この間押さえつけられていたような気がします。

4月8日にいったん学校を再開させる運びになった時、「こんな時に子どもを集めるのか」という批判がありました。そして再度臨時休業が決まると「学校がないと子どもの生活がだめになる」という批判がありました。テレビのニュースでは県外ナンバーの車を咎める人が報道されたり、山や海ならいいんじゃないかと繰り出した人びとを批判的に報道する場面もありました。ネット上では有名人の発言が取り上げられて炎上していました。デマも飛び交っていました。批判が炎上したり、批判はやめようという発言が炎上したりもしました。そして突然のように議論になった「9月入学制度」。この議論が大盛り上がりしたことで、人びとの耳目が一時期そちらに流れました。

こんな時に、まず私自身は何をしようか、と考えました。それは、新型コロナウイルスについて、憶測を取り除いた情報や知識を子どもたちに伝える準備をすることでした。学校が再開したら、まず最初に新型コロナウイルスとは何なのかを伝えなければならないと思ったのです。子どもたちは、今回の流行により通常の卒業式や入学式が行えず、外出自粛を求められ、授業はストップし、行事は中止になったり延期になったりしました。そのようなことが、「大人の判断だから従うしかなかった」というのではやりきれない。ただし、正確な知識を与えることで、「だから大人の判断に従うしかなかった」ということにもしたくない。これまでに経験したことのない事態を、自分で正確に見極める「目」を育てたい。デマに引きずられたり、エライ人の判断に引きずられたりするような生き方はしてほしくないと思うのです。そこで、新型コロナウイルスについて授業で使うパワーポイントを作り始めました。すると、案外難しい。科学的な事実を並べるだけでは、子どもたちの要求に合わないように思えるからです。子どもたちが知りたいのは「なんでこんな不自由な生活を3ヶ月も強いられたわけ?」ということだと思うのです。それで、質問形式にしたりクイズ形式にしたりして真偽を確かめていくような教材を作ってみました。作ったものを、日頃頼りにしている研究サークルで検討してもらいました。検討会はインターネットを介したZOOM（オンライン会議システム）を使い、17名の先生や大学生が参加しました。議論になった点を作り直して完成させると、子どもたちと会う日が楽しみになってきました。

臨時休業中、学習課題を子どもたちの家に配って回りました。接触を避けるということなのでポストインです。中には、私が来たことを察知して、玄関から顔を出してくれる生徒がいます。「ありがとうございます」と言って笑っています。「おー、元気か」と少し離れたところから声を掛けました。車に戻ったところで、思い返して、あいつ、いつもの学校ジャージじゃん、と思って笑ったのでした。

（多賀城・高崎中）

中学校

休校に思う「学校」の温もり

千坂朋広

1　突然の別れ

2月27日の夕方、突然の休校要請。翌日、仙台市からも「3月2日から休校とする」旨の通知が来た。その内容には、卒業式の時間短縮、出席は卒業生と教職員のみ、感染拡大防止策の徹底といったものが含まれていた。3年生にとっての登校日は、28日と3月7日のみとなった。

28日、本校では3年生の4時間目を学年集会にし、5時間目は学級の掲示物撤去やお別れの時間となるように授業変更した。また、通知を受けて卒業式の行い方について話し合った。その際、感染拡大防止の観点からすれば、教室での式、代表生徒への授与、合唱などはなしといったこともあり得たが、「生徒

の意向を聞かせてほしい」という提案を了承してもらえた。学年集会で生徒は、「卒業証書は一人ずつ、体育館で校長先生から受け取りたい。たとえ、会場に出席者が先生達だけでも、卒業の歌も2曲歌いたい」が大多数であった。これをベースに卒業式短縮バージョンを組み立てた。28日の突然の別れも7日の卒業式も、人の温もりを感じる節目となった。

2　始業式・入学式の延期

新年度、入学式の2度目の延期後、教科書等の受け取りやクラス発表のために分散登校を行った。学区内で感染者が出ていたこともあり、感染拡大防止と子どもの命と健康が第一の観点から、時間帯を6つ設定して3日間の分散登校を行った。久しぶりの登校となった生徒達は、笑顔で友達と再開を喜び、話をしていた。「3密を避ける」とはいうものの、人は人の温もりを求めて集まるし、学校とは「3密が必然」となる場でもあることを、改めて感じた登校日だった。

3　学校再開に向けた矛盾

6月再開には、当然「感染拡大防止を徹底し、3密を避けて授業をする」という条件が伴う。しかし、学校は「咳エチケット、手洗い・うがい、換気、マスクの着用」といういわゆるインフルエンザ予防と同様のことを徹底するしかない。変わったことと言えば、「朝の検温と一日一回以上の消毒」だが、そのための物品の保障はない。教育行政は、「3密が必然」の学校に「3密を避ける」ために分散登校などの工夫を求めるが、学習指導要領など教育課程の変更はいまだない。同様に給食も「給食は話さないで食べる」、「下膳時は密集しないように時間をずらす、下膳場所を1カ所にしないなど工夫する」と求めるが、給食車の回収時間や給食パートの勤務時間変更の保障もない。

学校で教職員は、「何かおかしくないか？子どもの学習機会の保障は大切だが、それは命と健康が担保されてのことではないか？」と考えている。「話さない、くっつかないなどの管理と教育課程の履修だけを徹底すれば、子どもも教職員も学校が息苦しいものになるだろう。もし子どもに感染者が出れば、現在よりも拡大スピードは上がるのではないか。それは医療従事者の命と健康を、今まで以上に危険にさらすことになるのではないか」と矛盾している現状を心配しつつ、感染拡大防止をしながら人の温もりを感じられる学校と、再開後の教育活動を長く継続するにはどうしたらいいかを話している。生徒が来ない閑散とした学校の中で、学校は人に温もりを与える場所であることを痛感している。

（仙台・七北田中）

高等学校

コロナ禍の世を生きる

伊藤　真由美

あの日、私は学校にいた。

2月27日夜7時を過ぎていた。

「3月2日から全国一斉臨時休校だって！」

職員室で1人の先生が驚きの声をあげた。

管理職は退勤していて、もういなかった。

3月1日は卒業式だ。アドレナリンが一気に体内を巡る音が聞こえる気がした。

新型コロナ感染予防対策で、卒業式の予定を変更し、形が決まったばかりだった。すでに26日に式場設営が終わった体育館から、在校生のイスを片付けねばならない。その計画を組んだところだったが、首相の一言で、また練り直し。在校生が登校できるのは28日だけになってしまったのだから、超スーパー忙しい28日になった。

例年は、卒業式前日在校生の前で表彰式が行われる。体育館ステージ前には、優勝トロフィーやカップ・優勝旗が所狭しと並ぶ。東北大会や全国大会で活躍した生徒には、（株）渡辺採種場から「渡辺奨学賞」が頂ける等、本校ならではの表彰式なのだ。部活動を頑張ってきた生徒には、晴れやかで誇らしい瞬間のはず……なのだが。今年は、残念ながら

卒業生だけの参加となり、申し訳ないくらい寂しい会になってしまった。

ただし、卒業式は保護者と来賓が参加して挙行できた。「せめても……」である。

それにしても、まさに「寝耳に水」だった「3月2日から春休みに入るまで臨時休校」の要請は、突然過ぎる！　という顰蹙を除けば、授業への影響は、ほぼなかった。なぜなら、今年度から高校入試が一元化、追試験が初めて導入された。同じ答案を3回採点するので、採点日も多い。加えて、定員割れした本校では二次募集もあるので、3月に在校生が出校する予定が、そもそもないに等しいのだ。

しかし、のちに首相の要請は、なんの法的根拠もない「越権行為」にすぎないこと。「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」も、「一斉休校」に関して一切議論をしていなかったこと等を知れば、さすがに腹が立つ。

そもそも、国定教科書に象徴されるような戦前教育の在り方を反省し、教育委員会は「公教育の独立性を確保するために作られた」等という歴史は、まさに「絵に描いた餅」であることを露呈したわけだが、もしかしたら、あの夜私たちは試されていたのかも知れない。

事実「何の権限があるんだ！」と問われた首相は、翌日には「基本的な考え方として示した。各学校、地域で柔軟にご判断いただきたい」だの「地域や学校の実情を踏まえ、各学校の設置者の判断を妨げるものではない」だのと発言。

あの夜、休校要請が「越権行為」だと認識できた人は何人いるのだろうか。せめて教育委員会のメンバーには、踏み絵を踏んだ意識をもっていて欲しいと思うが、そんな議論があったようには思えない。

何はともあれ「上から言われたら、やる」それも「ちゃんと、やる」ことが、身体の奥深いところまで浸透している気がする。だから、こんなに検査をないがしろにし、本当の感染者数もわからない状態でも死者が少ないのだろうと思う。

さて、春休み明けの学校は二転三転。学校で対応策を練り終えた頃、県から新しい通達が来て覆ることの繰り返し。4月1日には、通常の始業式と入学式が予定されていたが、その後始業式は延期。入学式は新入生のみ放送で行い、保護者は駐車場で待つ形になった。4月は毎日対策会議ばかり行っていた。町内に罹患者が出たので、4月は臨時登校日を設定できず、在校生が分散登校できたのは5月18日になってからだった。（自分の）子どもの休校に伴う特休ができ、在宅勤務が認められたのは有り難かったが、東日本大震災時より見通しが立たない毎日はストレスが多く、鬱と隣り合わせで過ごした3ヶ月だった。

それに、高校でオンライン授業ができている学校は、どのくらいあるだろうか。

本校では、家庭にＷｉＦｉ環境がある生徒は90％もいるが、課題を家で印刷できる生徒は55％しかいなかったので、課題は郵送になった。さすがＯＥＣＤ最低の教育費をかけてきただけのことはある。「世界から周回遅れ」と言われる日本の教育環境で、もうすぐ酷暑の夏がやってくる。もちろんクーラーは、ない。

（遠田・小牛田農林高）

※エアコン設置は、小中学校で進んでいるが、県立高校では進んでいない。

支援学校

休校と「通信」教育

渋谷　耕造

休校中の「通信」

担任が「そろそろ時間だね。また来週火曜日の9時半に。さようなら」と病棟にいる高等部3年生の生徒に言葉をかけて30分間のオンライン「通信」が終わりました。

本校は、仙台西多賀病院に隣接する病弱の特別支援学校です。学校と病棟は自動ドアと

エアコンが設置された通路でつながっています。

2月27日夜、首相は突然、学校の一斉休業要請を行いました。何の準備もなく、生徒も教師も学び合い高め合う場である学校が休校となりました。

病棟にいる生徒の生活は一転しました。やむを得ないことですが、新型コロナウイルスの院内感染防止のため生徒も教師も学校と病棟の往来はできません。家族でさえも原則として院内の子どもとの面会はできません。家族からの届けものは看護師が受け取っています。生徒は病棟内で移動できる範囲が限られ不自由な生活を送っています。

休校の再延長が続く中、病棟の協力で5月上旬から週3回、朝の30分間、入院している高等部2名の生徒とタブレットの通信機能を使ってやりとりができるようになりました。

高等部設置前の「通信」

先日、教材室を整理している時、昭和43年の創刊号から平成7年までの児童生徒会誌を見つけました。

中学3年生が書いた文章には、あちこちに「通教」という言葉が使われています。「通教」とは、当時は仙台一高に設置されていた通信制課程のことで、「通信教育」を「通教」と呼んでいました。

次は当時の文集からの抜粋です。

「僕は卒業したら仙台一高の通信教育をやってみたいと思います。この通信教育は、仙台一高から送られてくるレポートを書いて出してやります。スクーリングというのがあって、この時は先生が来て勉強をします。そして、スクーリングがない時は自分で勉強します。」

「今の私には通教（一高の通信教育）の道しかない。ことばは簡単に通教といっても実際に教師がつくのは、ほんの何時間で、いわば独学独習だ。」

「私は病気がなおって社会に出ても困らないように、勉強しなければなりません。通信教育は自学自習なので、中学校の基礎的なことをしっかり覚えておかなければなりません。」

1979年の養護学校義務化により重度・重複の子どもも養護学校で学べるようになりましたが、県内の養護学校に高等部設置が増えたのは平成（1989年）に入ってからです。昭和49年（1975年）には日本の高校進学率は90％を超えていましたが、本校に高等部が設置されたのは平成6年（1994年）です。それまでは入院生活を続ける中学部卒業生にとって、高校進学は大きなハードルでした。

高等部ができたことにより、入院していても中学部の時と同じように高校の学習ができるようになりました。高等部では、生徒の発達段階や特性等を考慮して複数の教育課程を編成しました。

コロナ後の「通信」

多くの学校で休業が長期化し、オンライン通信による朝の会や授業などが取り組まれています。政府は、緊急経済対策の一つとして全ての小中学生が学校で一人1台のパソコンやタブレットを使える環境整備計画を前倒しする方針を決定しました。パソコンやタブレットの整備や導入後のメンテナンスなどで関係する企業は潤うでしょう。

国は教育のＩＣＴ（情報通信技術）化による「個別最適化された学び」を提唱しています。今後、パソコンなどを使った個別学習がどんどん学校に取り入れられるのではないでしょうか。

パソコン関連の企業だけでなく民間教育産業がより多く学校に入り「公教育の市場化」が加速すると思います。コロナが収束したあと、「教育のＩＣＴ化」と相伴って、児童生徒がばらばらにパソコンやタブレットで学習する度合いがとても増すのではないでしょうか。学校が大きく変貌してしまうことが心配です。

（仙台・西多賀支援学校）

私立小学校

目の前の子どもから出発

藤田康郎

1．なぜ今さら文科省の言うことに従うのか？

私は新型コロナウイルスの感染が拡大したことで、子どもが遠くから通学してくる私学はすぐにでも休校すべきと考えた。一番懸念したのは少なくない子どもが喘息などの基礎疾患を抱えていることだった。電車やバス内での感染が命に関わる。ただ、職場では休校になかなか合意できず結果的に政府による一斉休校要請を待つことになった。「和光はなぜ今さら文科省の言うことに従うのか？」との保護者からの声が届いた。この時点では都内の私立小学校の休校は2校のみであったが休校の決定が遅れたとの批判である。私たちには常に自分たちの頭で考え、判断することを期待されていると感じた。

2．できる限り子どものことを考えたかった

休校により6年生にとっては小学校最後の半月を奪われた。条件が厳しい中でも6年生のための卒業式を実施した。在校生は5年生のみの有志参加で1年生から5年生までの子どもたちから寄せられた言葉をつないで「送る言葉」とした。式を終えて「5年生は練習期間もないのに素敵な在校生たちの言葉をありがとう」と保護者から感謝された。登校はこの日のみで、あとは5月末までずっと休校になった。

子どもの学ぶ権利をどう保障するかを何度も話し合った。各家庭がパソコンやタブレット、WiFiの設備などの機器をどの程度所有しているかを一斉メールで調査した。一部の家庭にはWiFiのルーターやタブレットの貸し出しを行い、3月の残りの単元と4月からの新しい教科内容などをプリントと動画配信で補うことにした。

論議の過程では「オンライン授業」を推す声もあったが、そもそも「オンライン授業」という言葉の定義が曖昧であり、また、双方向同時通信を使っている小学校は調査全体の5％に過ぎないこと、リアルタイムの通信で36人の子どもを相手にした授業は現時点では不可能という結論に達した。インターネットを介した動画配信による教材解説に決まった。小学生にとって機器を操作し、学習に向かわせるには保護者の多大なる協力が必要である。そして全ての家庭の協力を得られることは望めない。医療関係者のみならず、生活を維持することで精一杯の家庭もある。また、動画とプリント学習に対する子どもの反応がつかめない。したがって動画は配信するが履修したことにはしないことを確認した。

3．授業とは何か

学習プリントを作成し、動画をYouTube上にアップした。これがとても難しい作業であった。対面式の授業であれば、子どもの「どうしてそうなるの？」という質問や疑問をもとに教師は伝え方や教具を工夫して授業に臨むことになる。子どもは子ども同士のやりとりや子どもによる説明の方がよく理解できる。また、実感を伴う教具を用意することで子どもに深く考える機会を与えることができる。当初は6年算数の「平均」を動画配信のために教材研究を進めた。しかし、研究をすればするほど、この単元は無理であることがわかった。平均は「凸凹のある量を平らにならす」というイメージが大切で、そのためのシェーマとして「平均水槽」というものを扱う。アクリル製の水槽に仕切りを設け、いくつかの部屋に分けたものの中に液体や細かな粒子を入れ、その仕切りを取り外すことで「平らにならす」というイメージができる。水槽を実際に操作させることが平均の認識につながる。また、子どもたちに100m走の個人タイムやバスケットでゴールを決めた回数から班ごとの平均を求めさせるなど、具体的な活動を通して「平均したくなる状況」を

作り出す。これが動画による平均の求め方の解説だけでは、子どものものにはならないと感じた。実感のある学びができず、子どもたちが一緒に学ぶことができないのは大きなマイナスである。一方で歴史学習の導入では学校近くにある歴史の痕跡を訪ね歩く映像を作った。本来ならば子どもたちを連れ出して石碑に触れ、大きさを確認させるが、それが無理だとしても動画を通して身近なところに歴史があることに気づかせることはできた。

このように試行錯誤であっても子どもにとって学び甲斐のあるものは何だろうか？と教材研究を繰り返した3ヶ月であった。その他家庭や子どもを孤立させないために担任が全ての保護者・子どもと面談（電話やビデオ）やＺＯＯＭを介した朝の会を週に数回実施した。子どもたちはクラスの仲間の顔を見ることができて恥ずかしそうにしながらもとても喜んでいた。保護者も学校とのつながりを感じたと感想を寄せてくれた。

4．自分の頭で考えること

9年前の東日本大震災時も休校を余儀なくされた。さらに退学して放射能汚染から関西や九州方面へ避難する家庭が続出し、学校としての機能がストップした。しかし、今回の3ヶ月にもわたる休校は子どもの学習権をどうやって保障するかという点を突きつけられた。マスコミなどではＩＣＴ技術の活用が報道されるが、それだけで授業ができるわけではないことも私たちは掴むことができた。子どもは個別に教師とつながるだけではなく、子ども同士のつながりの中で学び合う。仲間と一緒に成長することも確認することができた。これまで当たり前だったことができなくかかわらず厳しい反応の保護者も皆無ではなくなることで大切なものとは何だったのかを考えるきっかけになった。そして誰かが決めてくれるのを待つのではなく、自分の頭でものを考えること、目の前の子どもから出発して判断することの大切さを改めて感じた。

（東京・和光小）

私立高校

コロナ禍に翻弄される私立高校と岐路に立つ高校無償化

加藤　俊直

コロナ禍は私の勤務する仙台市の私立高校にも否応なく猛威を振るっている。3月2日から学校は臨時休業を続けもうすぐ3か月になろうとしている。5月25日から分散登校が始まるがその間に失われた授業の機会はあまりに大きい。公立高校は村井知事の方針がテレビで流れれば県全体がそうなのだからと納得を得られるかもしれないが、私立高校はそうはいかない。スクールバス・冷暖房完備が当たり前、このような事態でも、ネットで授業をやってくれるんでしょうと期待される。ところがこのような誰も経験したことのない惨禍の中、オンライン授業をするための設備などまるでなく、そもそもそのようなノウハウも持っていない。しかし、保護者からは授業をやらないのなら金を返せと言われる。県からその必要はないとのお墨付きがあるにもい。かくして、学校は急遽契約中の業者に依頼し授業動画掲載用のサイトを作成、教員には各自、持っているコマ分の授業動画を撮影してアップロードしろとの命令が下る。撮影機材も何もない、あるのは各自何とかしろという無茶な命令のみ。さらに、毎朝8時45分からＺＯＯＭという誰も使ったことのないアプリでオンラインで朝礼を全クラスやれと言われ、「まずは、できるところからやってみよう」という能天気な掛け声が響き渡る。パソコンはおろか携帯電話すら持っていない教員が絶滅せずに生息している我が校においてである。

しかし、このような無茶な命令にも本校の教員は今度ばかりは一丸となって対応した。時代というものも幸いしたかもしれない。ほとんどの教員が、スマートフォン、ビデオカメラ、一眼レフなど何らかの撮影機材を持っていた。自撮りに慣れている若者世代の教員は器用に自分の教室でたった一人で授業動画を作成した。私のような「写真は魂を抜き取

られる」派の人間もスライドに音を後付けする知識を持っていた。また、同一科目複数クラスを持っている教員は一クラス分の動画だけでいいという意見も通った。そして、デジタルに無縁の化石人類は得意な人間が撮影してあげて動画のアップロードもしてくれるという美しい友情の風景も見られた。同じような感じでＺＯＯＭ朝礼も職員一丸で乗り切った。このようにして、オンライン授業を実施しながら何とか登校再開にこぎつけたのである。

しかし、前途は多難である。私が担任をする3年生のクラスは運動部に所属する生徒が多く、スポーツ推薦で大学を目指している生徒が多い。しかし今年は高校総体が中止となり、実績をアピールする機会は奪われてしまった。そもそも全国に目を向ければ、この原稿を書いている5月22日時点では首都圏の緊急事態宣言は解除されていないし、全国で同一に行われるはずの大学入試が宮城の事情だけで決まるはずもなく、第2波、第3波に備えるべきとの各知事の声が響きわたる中、どこに焦点を当てて進路指導をすべきか皆目見当もつかない。そして、約2割いる就職希望の生徒については、我が校から就職の多いホテル業などが壊滅的な打撃を受ける中、どの程度の求人があるのか見通せない。10年前のリーマンショック後は「就職は無理だから進学しよう」と言ったものだが、社会状況は当時より悪化しており、「就職はないけど進学する金もないので卒業するだけ」となりかねない生徒がわんさかいる。国や県は昔から学力優遇主義で成績の悪い生徒は切り捨てられるのが世の常である。

このような中、村井知事の発言が発端となって急に話題になった9月入学は問題を全て一気に解決してくれる救世主のように思える。もちろん、小学校から大学、大学院、就職時期が一気に変わるのが大前提であるが。ところが、この議論にもほとんど全ての人が忘れている問題がある。令和2年度を17か月にして令和3年度から9月入学を始めるというが、生徒は12か月分しか授業料を払わないのだ。少子化の影響で私立高校はギリギリの経営状態の学校が多く、体力のない学校はこの5か月分の人件費等必要経費を確保できない可能性が高い。大阪府知事は「国が負担すればいい、一人10万円よりよっぽどかからない」と言うが、国が私立高校を見殺しにしないような施策をするのか甚だ不安である。

さて、私は宮城県私学助成をすすめる会の事務局次長という立場でもある。「高校無償化で私立もタダになったんじゃないの」と考えている人も多いかもしれないが、そんなことは全くない。私立高校生の学費は主に①授業料②施設費③私学助成金からなっており、金額はおよそ①が40万円、②が15万円、③は35万円である（年額）。その他に1年生は入学金もある。①、②は保護者の負担、③は県・国の負担である。今年度から世帯収入が590万円未満の世帯は国が①を支給することになったが、②は全額保護者負担のままである。すすめる会では②は県が負担すべきと県議会・国会に働きかけてきたが、県はなかなか動かない。生活保護世帯でも②は支払いを求められるため、いまだにこのために退学者がでることもある。①への支援が拡充された今年は勝負の年と対県交渉を強めるべく、東北の仲間と対策を重ねてきたが、コロナ禍で全ての交渉が暗礁に乗り上げてしまっている。このままでは、すすめる会の20年の努力が水泡に帰してしまう。「コロナで苦労しているのは私学の生徒だけじゃないんだよ」という私学公益法人課課長の言い訳が聞こえてくるようである。

（仙台・私立高校）

私学助成を求め署名活動をする高校生

保健室

ここからスタート

近藤裕美

1．胸が熱くなる

朝、校舎の窓から、生徒の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。久しぶりの様子に、胸が熱くなる。ああ、この感情は、震災後仮設校舎の校庭で子ども達が遊んでいる姿を久しぶりに見た時と同じだったようにも思う。校庭で、遊んでいる子ども達の姿を見ることができるようになったのは、仮設校舎に引っ越すことができた震災から約10ヶ月後のことだった。

2．再会後の予防対策

令和2年5月25日、午前授業ではあるが、連続しての授業登校日が始まった。昇降口での朝の体温・体調チェックから始まり、朝の会、そして授業開始。生徒が下校してからは、全職員での校舎内の消毒作業。午後からは、学年会や教科部会、職員会議など、6月1日からの学校再開に向けての会議が連日行われた。午前授業だったおかげで、感染症予防対策の、消毒作業に全職員が関わることができた。6月1日からは、6校時まで授業があり、その後は、部活動の再開。通常の学校生活に、新たな感染症予防対策を加えるとなると、時間のことや消毒作業や3蜜にならないような工夫が必要となり、頭を悩ませている。更に、状況や情報が日々変化し、その都度対応策を変更したり、検討したりする日々が続いている。先週は、部活動の内容と一緒に昼休みの過ごし方について全職員で話し合うことになった。学校生活で矛盾が起きないように、部活動ではパスやキャッチボールなどの組みになっての練習は、当面の間中止なのに、昼休みに、ボールを使って遊んでも良いではおかしいのではないか。いっそのこと昼休みをなくそうか?それとも、掃除時間にして部活動の時間を長く設定するか……。様々な意見が出され、結局昼休みを設定し、6月1日の朝の会を、安心に学校生活を送るためにどのように過ごしたら良いのか考える時間とした。今は、考えられることを一つ一つ職員で確認しているが、6月1日からは、このような確認時間の確保はとても難しくなってくると考えられる。

3．仲間に支えられて

北海道や北九州市で第2波が発生している。北九州市内の小学校が、クラスターの発生現場となったり、中学校でも感染者が発生したりしている。いつ東北や宮城県でも、第2波がくるかと想像すると、より不安が募る。しかし、この不安な気持ちは、人と繋がっていることを確認できたことで、解消されている。まず、県内の組合に所属している養護教諭の皆さん。新型コロナウイルス感染症対策として、今回更に多くの方々と繋がることができた。各自が知り得た情報や、対応策などを共有してくれ、迷いや不安にも答えてくれる。市町村での違いがあっても、同じ宮城県の養護教諭である。学校では、1人で奮闘しているが、皆さんが自分と同じような状況に頭を悩ませ、頑張っていると知り、共にこの状況を乗り越えていこうという気持ちになる。

また、職場の仲間にも、支えてもらっている。学校での感染予防策。国や県、市町村から提示された事を理解し、解釈し、現場でできる対応策を考え、全職員で実践していく。今回は特に目に見えないウイルスへの対応になる為、効果がすぐに見えるわけではない。しかし、子ども達が生活する学校の場を、安心・安全な環境に整える為には、職員が同じ方向を向き進むことが大切である。現在、校長の「一に命、二に生き方」の方針が中心となっており、職員がチームとしてまとまっているおかげで、全てにおいてスムーズに進んでいると感じている。

4．未来を切り開いて

震災の時は、前に進めば、現状を打破できると思い、どんなに苦しくても前進できた。

保護者・子

新たな取り組みをしてみるいい機会

佐藤　秀

今回は、先が見通せない。それでも、立ち止まることはできない。この経験が、これからの生活にどのような意味をもたらしているのか分からないが、今できる事に精一杯対応したいと思っている。そして、今育っている子ども達が、与えられたものだけではなく、これからの未来を切り開いていけるように、導いていきたいと願っている。

（東松島・矢本二中）

ずっと家で過ごしていた

小学4年　佐藤　総

ぼくは、休み中、勉強したりゲームをしたりして、外にはあまり出ないで、家で過ごしていました。だから、学校は少しずつ慣らしながら始めたいと思っています。週に5回学校に行くようになると、コロナ対策があまり意味がないと思います。せめて、1週間に3～4回がいいと思います。

安心して学校生活を送れるように

小学6年　佐藤　諭

ぼくが休校中の学校について思ったことは、急に学校を始めると勉強についていけない人がいるかもしれません。だから、ぼくは、少しずつ学校に慣らしていくといいと思います。

そして、安心して学校生活を送れるようにしたほうがいいと思います。

小学校最後の1年が短くなって少し寂しいですが、これも勉強だと思っています。

コロナが落ち着いていってほしい

中学2年　佐藤　聖

学校が休校になって、急にまた再開になり、休校があまり意味なくなってしまったと思います。それは、休校の途中で、学校が少し始まってしまったからです。まだ、他の場所ではコロナが大変なのに、学校が始まってしまうと人と人とが接触して、もしかしたらコロナがまたまん延してしまうかもしれないからです。

自粛中、ぼくは外に出ることを我慢したり、他人となるべくかかわらないようにしているのに、また学校で他の人に会って会話したりいっしょに授業を受けたりして大丈夫だろうかと思いました。だから、みんながなるべく外に出ないようにして、コロナがどんどん落ち着いていってほしいと思います。

子どもの気持ちを考えて

高校1年　佐藤　陽菜

休校の間、私はほとんど家で過ごしていました。家では、日替わりで家事を分担して行ったり、学校から出された課題をやったり、家族と一緒に運動したりして過ごしていました。

休校になって、自粛生活にすっかり慣れてしまっているので、急に学校に行くのはかなり負担が大きくてたいへんです。GW明けに学校が再開すると思ったら、5月末まで休校延長となり、今度はいきなり前倒しで再開すると言われ、とても動揺しています。

授業が遅れてしまってなかなか大変なことは分かっていますが、ずっと家にいて体力もおちてしまっているので、このまま毎日学校に通って遅れを取り戻すために授業を受け続けるのは、心身共にとてもつらいです。大人の事情だけで決めるのではなく、子どもの気持ちも考えたうえで決めてほしいと思いました。

保護者　佐藤　秀

未曽有の危機に立ち向かっている各方面の方々に心から敬意を表します。共に頑張ってこの危機を乗り越えていきましょう。

当初は誰もが甘く見ていて子どもたちの学校生活もすぐに元に戻るものと思っていました。子どもたちは学校からの指示をよく守り、

健気に外出も控え家庭で過ごしていました。

しかし、気が付けばすでに3か月を超え、勉強の遅れが親としても心配です。

先生方もあの手この手で少しでも遅れを取り戻そうとされていますが通常授業ができない状況では限界があります。長期休暇を削っての対応も検討されているようですが何かもっと画期的なことでもしないと遅れを取り戻すどころか負担や不満ばかり増えるだけなのではないかと思います。

そこで提案ですが、一気に取り戻すから大変なので、中・長期的に取り戻す、またはいっそ取り戻さなくてもよいくらいのことを考えてみるのはいかがでしょうか?

これはあきらめるということではなく、この状況を生かして新たな取り組みを施行してみるいい機会ではないかということです。学校に通って集団生活ができないのであれば、集まらなくてもできる活動を代わりに行えばいいのです。

ルーチン化（マンネリ化）してきた旧態依然の教育活動やＰＴＡ活動を見直し、無駄をなくし必要最低限の教育活動で最大の効果をあげることができればよいと思います。具体的に何か策があるわけではないのですが、そういう気持ちで取り組まないと気が滅入るだけで精神衛生上よくないのですから、考え方を変えてみるのも手だと思います。この状況を少しでも良い方向に、気持ち的にもプラスになるように教育活動をしていただけると子どもたちも安心して過ごせるのではないかと考えています。

※以前、担任をした子どもと保護者に寄稿していただきました。（高橋達郎）

児童館

緊急事態下の子どもたちを守るもの

鈴木宏之

1．春休みまで

2月27日の学校臨時休業要請を受け市内小中学校は春休みまで休業となった。翌28日午後、仙台市児童クラブ事業推進室（以下、推進室）から指示文書が届いた。

春休みまで子育て支援事業や自由来館受け入れは行わず、児童クラブ（学童保育）事業だけを、それもできるだけ縮小して行うという指示だった。

保護者向け文書も添付され、急きょこの文書を印刷して下校間際、宮城野小学校で全児童に配ってもらった。

翌29日は児童クラブの保護者説明会。推進室に開催の許可をもらい、感染防止策を取り、時間を短縮して実施した。新1年生の保護者を含め、ほぼ例年に近い参加があった。

3月2日から小学校と協力して児童クラブの子どもの受け入れが始まった。できるだけ利用を控えてもらった上で、1～3年生は通常の放課後まで学校で受け入れ、その後児童館へ。4～6年は朝8時から児童館へ来ることになった（4月8日からは一部変更）。実際の利用数はそれまでの約半分。連絡は概ね行き渡ったようだった。

児童クラブは事前に利用日と帰り方を利用表として出してもらい、一日ごとの利用一覧を作成する。その上で登館と下館を記録する。この日から急に休業日扱いになったので、これまでの利用予定が変わる家庭が出てくる。

配信メールやホームページ、文書で保護者に知らせ、新たに利用予定を取り直していった。

2．卒業式・春休み

3月19日は卒業式。式後、元児童クラブの子が何グループか保護者と共に来てくれた。予防と対応に追われる中、陽光が差した思いがした。

また数日前に区内のお弁当屋さんから、子どもたちに昼のお弁当提供の申し出があり、そのお弁当がこの日届いた。「また食べたい」の声が聞こえるほど好評で、ありがたい支援だった。

その後も限られた利用人数の中、児童クラブの「卒業式」や、上学年の記念行事を行い、制約の多い中だったが年度の区切りを付けていった。

4月1日からは新1年生の利用が始まった。歓迎の行事を開いたり歓迎の絵を描いたりして、新年度の雰囲気を作っていった。

また、過密緩和のために4月1日から5日まで、宮城野小学校内の宮城野マイスクール活動室をお借りすることができた。一部屋増えることで目に見えてゆとりが生まれた。関係機関に改めて感謝したい。

3．春休み後

春休み後再び学校休業になった。休業は延長・再延長され、その都度利用予定の取り直しを行った。推進室からの保護者宛て文書も続き、郵送を繰り返した。こうした新たな利用の確定にはまとまった時間を要したが、今までのところ家庭との大きな食い違いがないことは幸運とも言えるだろう。

4月16日の全国緊急事態宣言を受け、23日には保護者宛てに「基本的に児童クラブ利用を控える」ようにという強い表現の文書が出た。この後利用数は最も減り、20人台になった。

児童館としても、館内の消毒を一日2回にし、昼食や食後の休憩の際もスペースを取るなどの対策を加えた。不十分な点も多いと思われるのだが……。

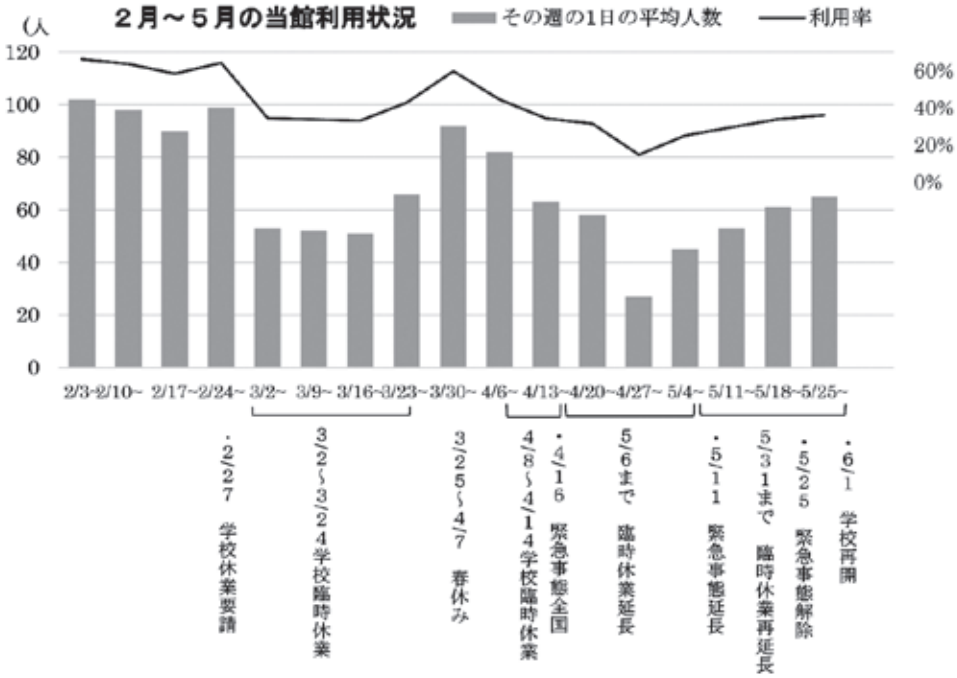
そうした中でも登館して来た子ども達は一日1回校庭で遊び、館内でも工作など可能な行事を続けた。

5月に入って徐々に利用数が増える中、児童館は学校再開の6月1日に向かっている。

これまで、学校・保護者・地域団体共に子どもの安全な居場所確保に向けて力を合わせてきた。その中でこそ児童館も開館してこられたと言える。地域協力に感謝して余りある。

振り返れば3月段階の、「学校は閉じるがそれ以上に緊密に触れ合う児童館や保育所は原則開ける」という最初のちぐはぐさがそのまま今まで続いてきた。そうしたところから検証することが、今後の感染予防に資することになると考えている。

（仙台・宮城野児童館）



コロナウイルス・未知の脅威が問う教育の役割

―どんな学校を開くのか？―

本田伊克（よしかつ）

1．問われる学校の二つの機能

現在世界中で進行している新型コロナウイルスの未知なる脅威が、私たちの社会と教育を脅かすとともに、学校が果たすべき機能を問い直している。近代学校は国民統合と学力・学歴序列に基づく選別を担う機能システム（教育システム）としての側面と、地域と不離一体のもの、地域の核としての側面をもって展開してきた。新型コロナウイルスがもたらす災禍と学校の長期休校、再開の動きのなかで、近代学校がもつこの二つの側面がいま、改めて問われている。[注1] 私たちは、未知なる脅威と向き合いながら、どんな学校を再開していくべきなのだろうか。

（1）学校が私たちの社会において果たす二つの機能

政治、経済、法、医療、福祉などの各領域に機能分化した近代社会を構成している教育システムとしての近代学校は、その施設・設備、教職員配置、学級数とその規模、提供するカリキュラムなどを標準化し、いわば「いつでもどこでも」同じ学校、いつどこにいても同様の機能とサービスを提供するものとして展開してきた。

いつでもどこでも同じ機能とサービスとは何か。まず、近代学校は、国家による価値や行動規範の標準化を通じて国民統合を担う「国家のイデオロギー装置」として機能してきた。[注2] さらに、近代学校は、『『互換性』的普遍性」（いつ、誰にとっても同じ意味を指向すること）の原理[注3]に基づく知識の伝達と、官庁や企業社会の地位・処遇の体系と連動した「価値換算表」に基づく学力・学歴序列を生み出し、この社会に根づかせた。

しかし、日本社会に機能システム（教育システム）としての近代学校が普及する過程は決して容易なものではなかった。

近代学校は、空間・時間の意味づけや知識・行動原理を全く異にする地域共同体のなかに突如として現出し、地域共同体にとってそれは「異物」のように経験され、近代学校が地域に根ざす過程のなかでは、学校に対する排除の動きや様々な衝突や葛藤があったのである。[注4] そのため、近代学校は地域共同体への浸透を図るために、自らの組織・運営の仕組みやカリキュラムに共同体の原理や仕組みを取り込みながら、また、新たに線引きされた行政村の区画に対応する学区コミュニティを形成しながら[注5]各地に普及し、浸透していくという歴史的・制度的過程を辿ることになった。

近代学校は各地に根を張る過程で、地域社会をまさに「生きている」子ども、保護者、地域住民のネットワークの結節点として、それぞれの地域に固有の生活条件、課題を背負い生業、文化を継承・発展する拠点としても位置づき、「いま―ここ」にしかない学校として、人々のつながりを育んでもきた。

学校という場では、知識・行動の標準化・規格化という教育システムの機能と、学校が根ざしている地域における人間形成の要求と作用とがせめぎ合ってきた。近代学校は、その標準化機能を単に果たすだけではなく、地域の「いま―ここ」に根ざす人間形成の要求に応答しながら、その性格を形成し、継承してきたのである。

近代学校は、このように、二つの側面を併せ持ちながら、また、両者の間に緊張を孕みながら、今日に至っているのである。

(2) 教育システムとしての学校の機能停止と「再開」

新型コロナウイルス感染拡大対策として、安倍首相は感染拡大予防に関する有効性についての科学的根拠も、子どもや保護者の生活にいかなる影響が生じるかということに関する社会的想像力もないまま、突如全国一律休校の「要請」判断を下した。この結果、学校の「日常モード」は強制的に「解除」され、(1)にみた学校の二つの機能も停止することになった。

学校の標準化機能が中断したことに対しては、国も標準授業時数確保についての柔軟な対応、最終学年以外の学習内容の繰り越し容認、家庭学習の成果の一部を授業実施したものとみなすなどの特例措置を示している。しかし、これらの措置はあくまでも「特例」であり、国が各学校の教育目標・内容と評価の在り方を強く拘束する体制を根本から見直そうとするものではない。また、全国学力・学習状況調査も今年度に限って中止が決定されたものの、全国・地域で学力テストのランキング競争を煽る仕組みを改めようとする気配は見られない。

子どもたちの多くは、先生や友だちと会えないことの寂しさ、一人で家で過ごさなければいけない辛さを感じている。かけがえない「いま―ここ」にしかない学校生活が奪われたことへの寂しさや不安だ。たとえば国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」が3月17日から22日、インターネットを通じて実施し、小中学校を中心に約960名から回答を得た調査がある。「休校で困ること」として「外出ができない」(30・6%)、「人に会えない」(20・6%)、「体調や感染への心配」(18・1%)、「勉強ができない」(15・3%)とある。家に閉じこもることを余儀なくされ、ゲームをしたりテレビを観たりする以外にやることがなく、友達や先生と会えない寂しさを感じている子どもの様子がわかる。

学校生活が奪われることによって、この社会で弱い立場に置かれている子どもたちへの直接的なケアが途切れ、学び・育つ権利が奪われる事態にもなっている。

(3) 学校的な日常への「再回帰」

では、二つの機能が強制的に中断・停止された学校が「再開」するとはどのようなことだろうか。5月下旬から6月初旬に全国の学校が再びスタートする。多くの地域で続いてきた長期休校からの学校「再開」は、これまでの「惰性的軌道」への回帰になるのだろうか? それとも、社会と学校の在り方、学校教育の機能と目的の根本的な問い返しを含む不可逆的な変化を意味するのか?

学校が国民統合と学力・学歴の標準化・序列化を担うシステムとして機能する日常に「回帰」するということは、社会の支配的地位や支配的価値に依拠する人々にとって望ましい能力や、規範化・標準化された行動様式を強いる「惰性的軌道」に

学校教育が再び収まるということである。

だが、学校的な日常として何が取り戻されるべきかということについては、教師と学校が子ども・保護者・地域社会と築いてきた関係や教育への期待や願いを捉え返す過程で、教育にかかわる人々の間でまさにいま模索が続いているともいえる。

2．どのような学校を再生・創造すべきか

（1）教育行政の諸施策に貫かれている硬直性と無慈悲さ

新型コロナウイルスがもたらす災禍は、私たちの社会がベックのいう「リスク化」の局面に突入したことを改めて認識させる。[注6] 社会がリスク化するとは、専門家の判断も割れる問題系、誰にとっても避けられないリスクの配分という問題系が現出するとともに、どの社会層に属する者にとっても生活条件が現在、将来において何らかのかたちや程度で脅かされる事態が普遍化することである。リスク化の局面に入った社会において、行政には現時点で知りえる情報を最大限に開示し、判断やその根拠が割れる場合にはそのことも含めて情報を示し、人々が意思決定し、行動選択するうえでのオプションを示す機能を果たすことが求められる。

首相の独断的な一律の休校要請は、専門家の知見を顧みず行われた。その後の休校延長や学校再開に向けた対策やスケジュールについては、その逆に専門家会議に丸投げしているかの対応もみられた。国民と学校に要請された「新しい生活様式」は、専門家会議の知見も踏まえているものだが、専門家会議の議事録は作成されていないようである。現在の政権は、政策的な判断の根拠となっている情報を提供することについても、政策決定の過程を事後的に検証できるようにすることについても、極めて後ろ向きであると言わざるをえない。

また、国家・地方の教育行政については、一連の「教育改革」施策と学力テスト体制による教育統制を通じて教育システムの競争的性格を強め、既成の構造と権限を温存し、教職員、子ども、保護者、地域住民への配慮どころか、その対極の無慈悲さすら感じられる対応を重ねてきたのではないか。

子育て・教育を家族と学校・教師の努力に依存し、学童保育など子どもの成長を社会的に支える場への財政・行政面でのサポートが欠如していること、子どもが集い、学ぶ場や機会が保障されていないことなど、私たちの社会の弱点も浮き彫りになった。

目の前の子どもたちが少しでもよりよく生き、学ぶことができるように、日々の教育実践に取り組んでいる教師たち。絶望や疲労、不安の中で、健気にも逞しく、あるいは思うに任せぬ状態に苦しみながら、新たな一歩を踏み出そうとしている子どもたち。苦しい生活・労働状況のなかで一生懸命に子どもを守り、育てようとしている保護者。子どもたちを支えようと厳しい条件のなか様々な支援を行っている人々。こうした人々が抱える困難への想像力と配慮を基調とした施策も求められている。

（2）学校を「再開する」こととは

学校を「再開」するというとき、それは途中で打ち切られた3月以降の「未履修」内容をまずこなし、オンライン授業化の前倒しや家庭学習による授業の代替化などを推進して無理やり進度を合わせることなのか？

4月は人事異動があり、教育委員会も、各学校の教職員の入れ替わりもある。統廃合によって、様々な困難を抱えながら教育活動を行っている学校もある。3月からの突然の長期休校、4月以降は休校継続か学校再開で子どもも教師も揺れ動く状

況、それぞれの地域の感染状況と国・地方の教育行政の方針の推移をみながら3つの「密」（密閉、密集、密接）を回避することの困難さなどに対処しながら、学習の「遅れ」を取り戻さなければいけないのだ。

だが、新型コロナウイルスがもたらす災禍のなかではっきりしたのは、子どもの命と権利を何よりも大切にする社会と学校をつくっていかなければならないということではないか。

長期休校後の学校「再開」が、財政効率優先主義、競争主義、学校運営・学級経営および教育課程編成・実施の規則と手続きの細分化を通した教育目標・内容の統制と管理の強化に基づく学校の再開であってはならない。

（3）「自分で考える子ども」とは

小説家あさのあつこ氏は、当たり前に続くと思っていた日常が突然、個人の事情ではなく国や社会の事情で変わり、卒業や学年が上がる直前の3月に自分でちゃんとお別れができず、友達と急に断ち切られ、学校で勉強するはずだった多くの時間も奪われた子どもたちに、「この時期にこそ、大人の言葉をうのみにせず、自分で考えて動いてみてほしい」と呼び掛けている。トイレットペーパーを買占めたり、マスクをしない人を「非常識」と言ったり、デマや不正確な病気の情報に右往左往したりするのは、ウイルスのせいというより、今まで見えずらかった世の中の弱点や短所が露わになっていると考えるべきだ。「わたしとあなたはちがう」「ちがうから敵だ」「ちがうから許さない」などと言って相手を攻撃して安心する、学校にも社会にもこれまでみられた状況がはっきりしただけではないか。あさの氏はこのように子どもたちに語りかける。さらに、大人が「命を守るため」という言葉の下に子どもたちに何をしたのか、きちんと検証しなければならないともいう。[注7]

「自分で考える子ども」とは、企業や政治権力に都合の良い方向でスマートに、物分かりよく考える子どもではない。突然友達とのつながり、教師とのつながりを絶たれ、家に閉じ込められ、学んだり遊んだり仲間と楽しんだりする機会を奪われた理不尽さを経験したことを、自らの生き方、人とのつながり、社会の在り方を考える原点にしてほしい。

最後に、学校での学習を通じで普遍的・客観的に物事を捉える視座を獲得することは、子ども一人ひとりの、人間としての「いのち」と生活の尊さを輝かせるためにこそ必要である。いや、子どもたちが学んでいるその営みのなかでそのいのちが輝いているともいえる。子どもたちは、学校で学ぶ知識や考え方を、地域の人々が様々な自然条件や社会課題と格闘しながら脈々と築き上げ継承してきた「文化」を発展的に継承していくために学んでいく必要もある。学校は教師と子どもたち、そして地域の人々が学び合うなかで、地域社会から地球規模の人類社会の現在と将来を展望していけるような教育活動を展開していく場になるべきであろう。

（宮城教育大学・センター運営委員）

注1　本稿の執筆にあたっては、小林信行「地域と学校」、石戸教嗣・今井重孝編著『システムとしての教育を探る』勁草書房、２００１年の議論に示唆を得た。

注2　長谷川裕「国民国家・ナショナリズムの生成と教育・学校」、久冨善之・長谷川裕編『教育社会学（第二版）』学文社、２０１９年。

注3　佐藤興文『学力・評価・教育内容』青木書店、１９７８年、54～55頁。

注4　柳治男『〈学級〉の歴史学』講談社選書メチエ、２００５年。

注5　葉養正明『小学校通学区域制度の研究』多賀出版、１９９８年。

注6　ウルリッヒ・ベック編『リスク化する日本社会―ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、２０１１年。

注7　あさのあつこ「休校中どうしてる?」、「朝日新聞」２０２０年３月22日９面（オピニオン面）。

98号の感想

サルとコロナと私たち
～内なる自然に向き合うとき～

伊　野　文　子

山極寿一さんの高校生公開授業の記録「サル化する人間社会～ゴリラから学ぶこと」を、興味深く読ませていただきました。

明星学園では小学4年生で人類の進化を学びます。なぜ脳が大きくなったのか。子どもたちとは、「たんぱく質を摂取するようになったから」「狩りなどを集団で行う際、コミュニケーションをとる必要が生じ、言葉を使用するようになったから」と話していました。

山極さんの「脳の大きさと集団サイズということ」「言葉を使用せずとも分かり合える共鳴集団という集団の数があるのだということ」、「ゴリラの世界は、負けないでいることが仲間を増やすことにつながるということ」「仲直りが頻繁に出てくる社会に暮らしているということ」、どれも、面白い！と思いました。

つうしん98号で授業の感想を書かれた里見まり子さんの「ゴリラの住む森から学ぶ非言語の世界の広がり」は、山極さんの文章を、さらに豊かにしてくださっていると思いました。2007年の京都で聞かれたエピソードは、大変興味深いです。

現地の方の足の裏の感覚は、自分の身体に根付いた、根拠ある行動であり、それこそが知性なのではないかと思いました。そこから、私の思考は、戦後教育に飛びました。文字に書かれてあるだけの学問を習得させ頭でっかちの人間を育てるのではなく、生活に根ざした科学を学び、自分の生活を変革していく主体を育てるのだという思想。林竹二先生や中森孜郎先生が目指した、70年代の宮城教育大学における教員養成も、そういう思想に根ざした実践者を育てる試みだったのではないかと思います。

里見さんは、現地の方の足裏の感覚のエピソードから、ご自身の「からだの感覚の覚醒と解放」と「足の授業」「森での授業」を紹介されていて、その辺りが、山極さんが後半で話されている、「サル化する人間社会」や「デジタル時代」「バーチャル」「フィクション」「IT時代」で心配されている『生き物としての人間の退化』や『共感力の退化』と響き合っていると思いました。里見さんが書かれているように、私たちはゴリラから学ぶべきことがたくさんあると思います。

世の中は、新型コロナウイルス感染拡大防止とセットで「ICT教育が大事なのだ！」と声高に叫んでいます。明星学園も、長期休校が余儀なくされる中で、子どもたちにICTを活用して、何かできないかを模索しています。私も、You Tubeに動画をアップして配信しています。会議もZOOMというオンライン会議をしています。しかし、これでいいとは思いません。オンラインの限界も感じます。今、大事なのは、安易に流れに乗るのではなく、功罪を見極める注意深さをもつという事だと思います。

新型コロナウイルス感染拡大で、【ウイルスとの闘い】と言ってウイルスを悪者として報道していますが、この報道に、最近違和感を感じます。もちろん、新型コロナウイルスは、怖いですが、そもそもウイルスと人間とは、どいう関係にあったのだろうか。そして、未来はどうなるのだろうかと。ウイルスを研究している学者の中には【ウイルスとの共生】を説き、ウイルスが人間の細胞に入り遺伝子を変えることによって、人間の進化につながり、遺伝子を強くすることにも役に立つのだと言っている人もいます（福岡伸一）。また、このような状況を生んだのは、人間が野生動物が住んでいる森などを開発で潰したために、野生動物と人間との距離が近くなってしまったから起きていることなのだ、だから、人間はこれまでの開発をこのまま続けるのか、立ち止まるのかという岐路に立たされていると説明している人もいます。

「私たちは、これからどう生きるのか」、大きな問いを自然界から突き付けられているのではないかと思います。学校再開を待ち望みながら。

（東京・明星学園小）

わたしの出会った先生 30

出会ったからこそ、つながる今

佐々木 紀子

人生の大きな岐路に立たされた時、人との出会いが大きな影響を与えることがある。

中学生の頃、私は、ソフトテニス部に所属していた。特に運動が好きだったわけでもなかったが、テニスに熱中しているこの時間が自分を一番素直に表現できていたように思う。だから私は、高校に進学してからも迷わずソフトテニス部に入部した。

高校一年の担任の先生は『須田先生』という国語科の男性の先生だった。「すごくまじめで分かりやすい授業をしてくれる優しい国語の先生」それが私の高校時代の記憶の中にいる先生である。

毎日学校に登校し、授業を受け、放課後は仲間や先輩達と思いっきりテニスをする……、そんな楽しい日々が当たり前になっていた。

そんな「当たり前」が奪われる出来事が起きる。高校一年の冬、以前から痛みを感じていた右足に激痛が走った。翌日、それまでとは違う病院を受診すると、「もううちでは手に負えない。明日、大学病院へ」とはっきり言われた。帰宅後、母が台所で泣き崩れていた光景を今でもはっきりと覚えている。しかし私には「なんとかなる」という思いがあった。入院が決まっても「なんとかなる」と楽観視し、事の重大さに気づいていなかった。

でも、現実はそんな甘っちょろいものではなかった。生活は一変した。私の右足を襲った病魔は「悪性腫瘍」で、その足に住み着いていた腫瘍は10㎝程だった。当然「当たり前」だった生活は奪われた。歩いてはいけない＝車いすの生活。入院して治療する＝学校にはいけない、テニスもできない、友達とはしゃぐこともできない。そして、私には過酷な抗がん剤治療が待ち受けていた。髪がすべて抜け、体力も落ちた。でも、ベッドの傍らにはテニスラケットがあった。いつかまたみんなとあの時のように学校生活を送る！　送りたい！　そんな思いだったのだと思う。

担任の須田先生は、病院から一時帰宅をするとその度に友人とともに家に顔を出してくれた。授業のプリントや補充の課題も持ってきてくれた。学校の様子を教えてくれた。とにかく、長期入院の私から「学校」という存在が離れないようにしてくれた。

春になり同級生とともに進級の時期を迎えた。二年生の担任も『須田先生』だった。先生は、私に「いつ戻ってきてもいいように仲のいい友達をクラスに集めたから」と話してくれた。学校という場所から遠ざかっていく私に須田先生はできる限り、考えられる限りの配慮をしてくれた。心の底から嬉しかった。

その一方で私の足には、抗がん剤も放射線もほとんど効かなかった。そして、手術で足を切断か温存かの選択を迫られ、足を失いたくなかった私はリスクを承知のうえで温存を選んだ。手術・リハビリを経て私は退院することができた。入院から二年の月日が経っていた。二年以上の休学は認められていなかったため、私は高校を退学せざるを得なかった。退学しても須田先生は家や病院に何度も足を運んでくれた。そんな先生だった。

同級生が社会人や大学生になった春、私は通信制の高校に再入学し、卒業後は通信制の大学へ進学した。教員免許を取得するためだった。走れない足の不自由な私がこの仕事をしていくには障害となることが出てくることも予想された。でも、あの『須田先生』のような、どんな生徒にとっても、どんな状況の生徒にとっても寄り添える「存在」になりたかった。

通信制の高校へ進学してからは、先生と会う機会はなくなったが、あれから25年経つ今でも年賀状はいただく。心温まる一枚。

いつか聞いてみたい。同じ国語科の教員として授業のことや生徒とのやりとりのこと。あのとき、私がどんなに心配を掛けた生徒であったかということ。

そして、伝えたい。先生に出会ったから私は障害があっても『先生』を目指したことを。「今」というかけがえのない時間のありがたさと人とのつながりの強さを教えてくれたことに感謝しているということを……。

（多賀城・東豊中）

もり問題

みやぎ教育相談センター
齋川勝利

東京に住むAさん（53才）という方から電話がかかってきます。短くて1時間、長いと3時間くらいになることもあります。「両親から住基ブロックをかけられ、両親と連絡がとれない」「以前住んでいた仙台の家に両親はおらず、今空き家の状態のようだ。ここに住み着いてしまう方法はないか、無料法律相談などの弁護士などとも法的なことも含めてアドバイスを受けながら検討している」というのが、当教育相談センターに電話をかけるようになった最初の頃の話でした。小学校5年生のとき、全校生徒が集まっている学校行事のときに阻喪をしてしまい、そのことが精神的に彼を追い詰めます。気持ちの整理がつかない。この不名誉を回復する道は、志望する高校に合格することしかない。しかし、その想いは打ち砕かれ、不合格に。望まない高校に進学しましたが、その高校では常に成績上位であることが、逆に彼を傷つけます。あるとき教室でものがなくなった。先生が「連帯責任だ」と全員を殴ったという。「生徒をそんな扱いしかしない学校に、今俺はいるんだ。」

国立大学に進学し、教職にもつきましたが30才前後から「ひきこもり」に。今は生活保護を受け昼夜逆転のような生活の彼の「主訴」は次のようなものです。「ごく当たり前の生活がしたい」「世間からごく当たり前の人間として評価されたい」「今手元に千円しかない。次に金が入るまでにあと1週間くらい過ごさなければならない」という彼の生活は困窮し、一時「立ちん坊」（寄せ場に立って建築や土木工事に雇われるのを待つ）もしたことがあるという。

小5以来、「自分の人生ではない」という彼は、「今からでも志望していた高校に入り直し、若い高校生と一緒に何の心配もない高校生活を過ごしたい」「自分が評価される一番の方法は女性から認められ結婚することだ」ともいいます。ではどのようにして?それを実現する道を考え、そのためにどのように動くべきか、そう考える私たちは、こうしたら?こうする方法もある、と誠実に答えようとします。しかしそのことがかえって彼を追い込んだり傷つけたりしていることがあると、私は今は思っています。

世間で最も評価されない人間、「それは犯罪など反社会的行動をする人か、仕事をしていない男だ」と彼はいいます。人と会うときでも「あなたは何をしている人ですか」ときかれるのが一番困る。どこにいっても、「蔑むような視線」、「無言の圧迫」を感じると。「第一、ひきこもり支援といわれる人たちが、ひきこもりはそこそこの居場所を作ってやればそれでよいと思っている。」「そんな仕事は望んでいないのに、『これくらいの仕事がありますよ』と提案してくる類（たぐい）だ。」

「本当は、今からでも高校生となり、大学を出て一番やりたかった研究職に就く、結婚して子供をつくる」「そういう当たり前のことをやりたいのに、『やれ』という人が誰もいない。」こんな彼のことばに、私も初めのうちはとまどいました。しかし、この「とまどう」こと自体が、「何もいわなくともひきこもりを当たり前の人間としてみていない、そういう空気を感じる」というのです。

相談センター報告（第21回）

ひきこ

現実問題としてどうなのか、というのが私たちの常識です。たとえば、生活保護を受けていると、高校には行けるが大学にいくことはできない。彼がやりたいことをそのままやろうとすると、あまりにもそれを遮る障害が多すぎるのが実情です。日本に住んでいるから「日本の常識」でしか対応できないように見えるのですが、世界にはノルウェーやフィンランドなど、大学授業料無しまたはそれに近いところもたくさんあるのです。ひきこもりの問題は、こうした社会変革の課題とも無縁ではありません。しかし彼の訴えは、そういう「常識」の問題でなく、ひとえに「心」の問題ではないか、と最近思うようになりました。

ある日、『乞食と王子』でないが、Aさんと私、交換するというのはどうでしょう」と提案したことがありました。「私は53才というあなたの若さはうらやましい」「私があなたであれば、やることはたくさんある」「はやくやらないと」というのがそのときの話でした。「私があなたならこうやるのに」と直接いうのは、その人の状況をみない失礼な言い方になる可能性があります。「乞食王子」の提案も、言い方が少し違うだけで、同じことです。私は怒られることを覚悟でしたが、案に相違して彼はこの話を受け止めてくれました。「あなたはひきこもりではない」「普通に人生を送ってきた人が普通にできることが、ひきこもりにはできないのです」というのがAさんの答。そう、私はAさんでないのでAさんのことはわからない。しかし、「できない」というAさんの状況は何となくわかる気がします。

いじめにあっている子どもは教室の全部からいじめられているような気分になる。ヒソヒソと話す声や、バタンという物音ひとつにもビクンとなったりする。以前、いじめ問題で、みやぎ教育文化研究センター通信にこんなことを書いたことがありました。「いじめられている子ども」と同じように、低評価の目で世間全体が彼をみている、と彼が感じており、そのことが彼の動こうとする意欲や生きようとする意欲をむしばんでいるのは間違いありません。

彼は当教育相談センターに来たこともあります。直接会うと「どこがひきこもり?」と思うような、立派な若々しい「青年」でした。知り合いのお坊さんと一緒に「ひきこもりを考える会」を主宰したり、「60を過ぎて（大学の）医学部を受験したい」という女性から相談を受けたり、知り合いの若い人たちから、「引きこもり問題で意見をいいあい、それをＹｏｕＴｕｂｅに出すので参加してくれないか」と頼まれたりもしています。ＮＨＫ「仕事の流儀」で取り上げられたひきこもり支援の石川清さんとはｆａｃｅｂｏｏｋの友達ということでした。

当教育相談センターは相談者の秘密は厳守します。ですから一人の相談者のことを、こんなに詳しく報告することはありません。このレポートは、「引きこもりの問題をたくさんの人に知ってもらいたいが、あなたのことを書いてもよいか」と、本人に断った上で出させていただきました。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL ０２２―２７２―４１５２

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき９時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

おすすめ映画
「ひろしま」（関川秀雄監督）

「1945年8月6日午前8時このときから、世界人類のすべては喪に服しているわけであり、人類の心は永遠にケロイドが捺されている」（DVDの深尾須磨子の文より）

1953年、日教組制作の映画「ひろしま」。監督の関川秀雄は、広島に投下された直後の地獄絵図の映像化に勢力を注ぎ、百数カットに及ぶ撮影を費やして、克明に阿鼻叫喚の原爆被災現場における救援所や太田川の惨状などの修羅場を再現すると共に、被爆者たちのその後の苦しみを描いた。助監督を務めた熊井啓監督はロケを振り返り、当時の苦労を語る。「川のほとり」と「川の中」では、監督自ら川に飛び込み、水に沈みこみ撮ったこと。国民学校や防空壕のセット作りと撮影で連日徹夜での作業が続いたこと。「広島の赤ん坊から老人に至る幾千万の人々が、何も不平をもらさずやってくださいました」というように、この映画を支えたのは、被爆者であり、8万人の広島市の中学、高校生、教職員、一般市民のエキストラであったこと。

完成後、この映画の意義が大きく、その反響が広まるにつれて政治的圧力が増してきた。最近まで、この映画の存在があまり知られなかったのは、それが原因ではないかと思われる。ただ、またこうしてDVD化されて、再上映の動きも出ている。関川監督の息子さんが上映に奔走していることが、テレビで紹介されていた。

新型コロナウイルス感染拡大のために、オンライン開催となった原水爆禁止世界大会の報告では、核兵器の危険が現実に迫っていることが改めて確認された。1万4000発の核弾頭が存在し、約1800発は都市に狙いを定めて、数分で発射できる態勢に置かれているという。5月24日付新聞によると米国が核爆発実験を再開するかどうか議論を始めた。

今こそ「ひろしま」の想いを、世界人類の共通の想いに！

（伊藤　真弓）

（このDVDはセンターにもあります。）

センターの動き

〈4月〉

1日　新年度スタート。菅井仁さんから高橋達郎へ引き継ぎ。会館内教育諸団体へ挨拶。

9日　県教育委員会に対して大震災時の県立学校の生徒犠牲者に関する開示請求。第1回事務局会議の準備。席を離すため会議室を借用。

10日　今年度第1回事務局会議。つうしん98号発送。センターの当面の行事・学習会の中止と「つうしん」99号のコロナ問題特集を確認。コロナ禍で事務局交代勤務開始。

21日　県教委から、「行政文書不存在決定通知書」届く。犠牲となった県立学校の生徒の調査報告書の文書が存在していないとは驚き。どういうことか？

〈5月〉

12日　延期していた宮教組と共催の「震災のつどい」の中止決定。

22日　「2020みやぎ教育のつどい」事務局会議。講演会はオンライン、レポートは紙上発表を検討。

26日　運営委員会特別委員会開催。これからの研究のあり方やテーマを検討。「研究部」として、つうしん読者にアンケート実施する。

〈6月〉

4日　つうしん98号の原稿入稿・校正作業。

12日　第2回事務局会議。つうしん発送作業。100号内容検討。

編集後記

4月17日「朝日」川柳「アベノマスク届いた着けた笑われた」。そこで私、6月4日現在「アベノマスクまだ届かない笑われる」。

たくさんの方からコロナ休業についての原稿をいただいた（今号は4ページ増）。貴重な歴史的証言集と今後の教育に対する提言集になっている。執筆者の皆さんに深く感謝。近くの方に広めていただければうれしい。感想をお寄せください。

この間、新しい言葉が溢れた。どうしても納得できない言葉がある。「オンライン帰省」。オンラインで帰省はできない。中島みゆきの歌に『帰省』という曲がある。1番のみ紹介。

♪遠い国の客には笑われるけれど／押し合わなけりゃ街は／電車にも乗れない／まるで人のすべてが敵というように／肩を張り肘を張り／押しのけ合ってゆく／けれど年に2回8月と1月／人ははにかんで道を譲る／故郷（ふるさと）からの帰り／束の間／人を信じたら／もう半年がんばれる♪

首都圏に住んでいる姉妹や我が子たちの帰省を思い、私はこの曲を聴くのはつらい。「オンライン講義」はあるだろうけど「オンライン授業」も私にはあり得ない。帰省も授業も顔を見て、空気を感じて意味がある。

（高橋）

センターHP
QRコード

発行：(一財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2020・6・12　発行責任者：高橋達郎
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp E-mail mkbkc@forestsendai.jp　印刷 株式会社きた出版